フランス世紀末文学叢書 V

責苦の庭

オクターヴ・ミルボー
篠田知和基 訳

国書刊行会

フランス世紀末文学叢書

①紅殻集　ピエール・ルイス　曽根元吉訳
②黄金仮面の王　マルセル・シュオブ　大浜甫訳
③碧玉の杖　アンリ・ド・レニエ　志村信英訳　二二〇〇円
④腐爛の華　ジョリス＝カルル・ユイスマンス　田辺貞之助訳　二八〇〇円
⑤責苦の庭　オクターヴ・ミルボー　篠田知和基訳
⑥フォーストロール博士言行録　アルフレッド・ジャリ　相磯佳正訳
⑦仮面物語集　ジャン・ロラン　小浜俊郎訳　二三〇〇円
⑧死都ブリュージュ　霧の紡車　ジョルジュ・ロデンバック　田辺保・倉智恒夫訳
⑨泥棒　ジョルジュ・ダリアン　小潟昭夫訳
⑩絶望者　レオン・ブロワ　田辺貞之助訳
⑪ニキーナ　ユーグ・ルベル　田中義廣訳
⑫室内　モーリス・メーテルランク他　倉智恒夫・川口顕弘・志村信英訳
⑬詞華集　田中淳一・立仙順朗他訳
⑭評論・随筆集　曽根元吉編
⑮仮面の書　レミ・ド・グールモン　及川茂訳

Le Jardin des Supplices
Octave Mirbeau

責苦の庭

オクターヴ・ミルボー
篠田知和基 訳

国書刊行会

口絵選定―澁澤龍彦

装　幀―山下昌也

目次

フロンティスピス（序章）　七
第一部　学術調査　三一
第二部　責苦の庭　一三一
訳者後記　二八九
口絵　アリ・ルナン《サッホー》

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

責苦の庭

――この殺戮と流血の文章を、宗教者と兵士と裁判官に捧げる。人間を訓育し、指揮し、統御しようとするものたちに。

O・M

フロンティスピス（序章）

ある晩のことである。いとも高名なる作家某のところに数人の友人が集まった。晩餐に堪能したあとは、何がきっかけだったか人殺しの話題に花が咲いた。とりたててきっかけがあったわけでもあるまい。そこにいたのは男ばかりである。モラリストにせよ、詩人にせよ、哲学の徒にせよ、医者にせよ、いずれも、一癖も二癖もあるへそまがりどもが想の赴くまま清談を楽しもうというところ。そこへ公証人輩が顔を出して、ちょっとばかり大胆な話柄に恐れおののいて腰を抜かそうと、気にする必要はない。――ここで公証人輩と言ったのは弁護士でもドアボーイでもよかったが、別段蔑んでのことではなく、たんにフランス人の精神傾向の平均値をさして言ったまでである。

そこで倫理政治アカデミーなる協会の会員氏が、あたかも折柄くゆらしていた葉巻の味具合について好みの程を言うかのように泰然と落ちつき払って口を切った。

「いやまったく！　人殺しこそ人間の関心のうち最大のものですわな。われわれの行為というものはすべてそこから出ているわけで……」

一同はさらに詳しい理論が聞かれるものと思って待っていたが、それっきりであとがつづかない。「もちろんですとも！」とそこでダーウィン派の学者が口をはさんだ。「おっしゃられたことは永

遠の真理です。例のラ・パリス殿のはやりうた（ラ・パリスが死んだ、パヴィアで死んだ、死ぬ半刻まえは生きていた、云々）が毎日毎日証明していたとおり……なんといっても人殺しこそわれわれの社会制度の基盤そのもので、ということはつまり、文化的生活の最優先課題で……。なにしろ、人殺しを筆頭として、すべて罪というものは諸政府の口実にのみとどまらずその存在理由でさえあるのですから……。人殺しがなけりゃいかなる政府もありません。そうなった日には、これはもう考えられないような滅茶苦茶で……。人殺しというやつは撲滅しようなんてしちゃいけない、反対に、上手に忍耐強く守り育てなくてはならんのです。ところで、そいつを守り育てるとなったら、これは法律こそその最適任者です」

異議の声あり。それに対して学者先生反論して曰く。

「いやはや！　ここは仲間うちですよ、猫っ被りはなしにしませんか？」

「そう願いたいですな！」と家のあるじがうなずいた。「本心をさらけだしてかまわないという、こんな機会はせいぜい利用することにしたいものです。私は本、あなたは法廷でですが、お互い公けには嘘しか言えないものですから」

学者先生はいっそう深々と椅子のクッションの中に身を沈め、それまでずっと組んでいたせいでしびれてきた脚をのばし、頭をのけぞらし、腕を垂らし、腹具合もよし、さて、煙の輪を天井へ吹きだして話をつづけた。

「そもそも人殺しは、それ自身で十分に発達をとげるものです……。はっきり言えばこれこれしかじかの情熱の結果だの変質症の病理学的な形だのというものではないんですね。まさにわれわれ

のうちにある生の本能です……生きとし生けるものすべてのものの中にあるやつで、生殖本能のように支配的な力をふるうやつです……。まさにそうなので、このふたつの本能はたいてい、お互いにきわめて密接に結びつき混じりあって、ある意味では同じひとつの本能を構成し、そのどちらがわれわれをして生命を生みださせようとするのか、あるいはそれを奪おうとさせるのか、つまりどちらが人殺しでどちらが性愛であるかさえわからないくらいです。盗みのためではなく犯さんがために女を殺していたあっぱれな殺人狂の告白を聞いたことがあります。その男にとって快楽の痙攣が相手の死の痙攣にぴったりと合うことこそスポーツでしてね、こう言ったものです。『その瞬間には自分が神で世界を創造するのだと思う』とね！」

「おやおや！」と、高名な作家が口をはさんだ。「殺人狂の例を引きあいに出されるとは！」

学者は穏やかに言い足した。

「われわれはだれでも大なり小なり人殺しなんですよ……。だれでも同じような欲望を、内心では抱いたことがあるものです。なるほどそれはほんのかすかなものではありましょうけれどね……。生来の殺害欲求は、それに合法的なはけ口を与えることで肉体的な力を減殺されています。産業、植民地経営、戦争、狩猟、ユダヤ人撲滅……等々がそれです。なにしろ法の外でその衝動に歯止めなしに従うことは危険なことですし、どんな精神的満足をえられるとしても、その行為の一般的な結果には見合いません。つまり監獄とか……うんざりするような、科学的興味のかけらもない判事たちとの押し問答とか、……それに最後はギロチンとか……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「そう言っちゃみもふたもない」と最初に口を切ったものが割って入った。「エレガンスもエスプリもない、本能的な動物で、心理の綾なんぞこれっぱかしもないという人殺しには殺人は危険な商売かもしれない……。ところが頭の回りがよくて気の利いた人間なら、どんな殺害でも不動の冷静心をもって遂行することができるものだ。罰を恐れることもない……。警察のお座なりの捜査にしろ、あえて言えば貧寒たる予審判事たちの常套的な罪因推理にしろ、そんなものの裏をかくことぐらい高等戦術には朝飯前だ。どこでも同じことだが、この分野でも雑魚が大物のかわりに年貢を納めている……。まあ、あんたでもどんなに隠された犯罪が多いかご存知だろうが……」

「見逃されているやつがね……」

「見逃されているやつも……そう、そう言おうとしていたところだ……。こういった手の犯罪のほうが見つかって罰せられるものよりはるかに多いことは言うまでもない。新聞ときたら、この、あとのほうのやつについてふしぎなくらい長々と百万言を費すが、その無思想ぶりには辟易させられる……。この点をまず認めてもらったらつぎには、知能殺人犯にとっちゃ警察なんか屁でもないこともどうだろう……」

「そりゃいいだろう。しかし問題はそんなことじゃない……。すりかえてもらっちゃ困る。私が言っていたのは、人殺しというのは自然と生きとし生けるものすべてにとって、正常な一機能であって、例外的なものではないということだ。というわけだから、個人をさしおいて、社会が、彼らを抹殺する権利をほしいままにするのはとんでもないことだ。そんな権利があるのは個人だけなの

だから」

「そのとおり！」と相槌を打ったのは愛想のよくてくだくだしい哲学者である。彼のソルボンヌの講筵には毎週、選りぬきの聴衆がつめかける。「おっしゃるとおりですな……。私としましては、少なくとも潜在的に人殺しでないものはいないと思います。たとえばですな、サロンとか、教会とか、駅とか、カフェのテラスとか、劇場とか、要するに人が大勢通ったりうごめいたりしているところで純粋に人殺し的見地から人相を眺めて暇つぶしをすることがあるんです……。そうしますとだれもが、目つきにしろ、首つきでも、頭の形でも、顎骨でも、頬骨でも、その個体のどこかに、この人殺し特有の宿命的な人相の痕跡を歴然と持っています。けっして気の迷いでなしに、人殺しと肱を接するなり、殺害欲求がまぶたの下で燃えあがるのを見たり、さしだされた手を握るときにそのふしぎな感じを感じたりせずには一歩も歩けないほどです……。先だっての日曜もとある村へ行ってきましたが、ちょうど村祭りで……葉飾りや花のアーチや満艦飾やで飾りたてた広場に、こういった庶民の楽しみには欠かせない屋台が並んでおりました……。官憲の慈父の如き目の下で善良なる大衆がうさを散ずるというわけで……。木馬だのコースターだのブランコだのは人影もまばらで、手回しオルガンがいとも楽しく魅惑的な曲を鼻声でかなでましても甲斐のないもので、お祭気分の人たちはみんなほかの楽しみへ吸いよせられてしまいます。射的をやる人、それも人間の顔を描いた的を長筒だの短銃だの、あるいは古き懐しき石弓なんかでねらうんですわ。かと思うと板っぱしの上に情なさそうに並んでる人形をボールで打ち落とすのもありましたわ。さらにはバネ仕

掛けをハンマーで叩くとなんとも愛国主義的なことにはフランスの水兵さんが動いていって棚のむこうのマダガスカルやらダホメーやらの現地人を銃剣で突き刺すようになっているのとか……。もういたるところ、テントやら提灯をぶらさげた屋台やら、みなこれ死のまねごと、虐殺のパロディ、皆殺しの実演……。そして、その善良なる人々がなんと幸せそうだったことでしょうか！」

この哲学者先生がはずみがついたらとまらない。一同ぐっと深く腰を下ろして、先生のご高説とその脱線との滔々たる奔流に身を委せることにした。

「私の見るところ、どうやらこの平和主義的遊興はここ何年かのあいだに大変な発展をとげたようですな。人心が温和になるにつれ——と申しますのは、何を隠そう！　人心は温和になっているからですが——殺しの楽しみはいっそう大きくなり、かつ大衆化されたものです……。昔は、私どもなどはまだ野蛮なもので、お祭りの射的なんぞ実に退屈なもんで見ちゃいられませんでしたよ。的といったってパイプや卵の殻が噴水にのっかって踊ってるといったものでしてね。もっとデラックスな店へ行けば鳥なんかもありましたが、といったって石膏製で……。なんて楽しみでしょう。いまは進歩の時代ですから、だれだって二スーも出せば人殺しという、この繊細にして文化的なる感動を味わえるわけです……。それに絵皿や兎が手に入る……昔のすぐに壊れる石膏の鳥だのパイプだの卵の殻だのといった、流血の情緒もなにもありはしないもののかわりに、いまのお祭りは頭をしぼって、老若男女の人形に、手足も巧みに動くようにし、いともふさわしい衣裳を着せているのですな……。その上で、この人形に身ぶりをさせたり歩かせたりするのでして……。実によく出

来た仕掛けで、これが嬉しそうに歩いたり、腰も抜かさんばかりに逃げたりするわけです。見てますと、この人形たちが三々五々書割の景色の中にあらわれまして、壁をよじのぼり、城のやぐらにもぐりこみ、窓からころげ落ちたり、落とし戸からとびだしたり……。まったく本当の人間そっくりにやりますし、手足も頭も動きますしね。泣きまねをするのもいますよ……貧乏人の様子をするもの……病人を演ずるもの……おはなしのお姫さまみたいに金襴緞子の衣裳を着るもの。まったく、この人形たちには知性だって意志だって魂だってあるんじゃないかって思いますな……生きてるんじゃないかってね！　中には真に迫って慈悲を乞うのもいます……。まるで『お願いです！……殺さないで下さい！』っていう声が聞こえるようです……動いているものが進み寄ってきて、身をよじって哀願するのをこれから殺そうってのは考えるだにぞくぞくするほどすばらしいことじゃありませんか！　そいつらに長筒や短銃を向けていると熱い血の味が口の中にひろがってきますよ……この、人間そっくりのものたちの頭を弾が打ち砕くときの嬉しさといったらないですな！　矢が厚紙の胸にずぶりと突きささって、小さな身体がぴくっとも動かずにひっくりかえって死骸さながらに横たわるなんて、こりゃもうむずむずしませんか！　聞こえるのは破壊と死の言葉のみです。『やっちまえ！　目をねらえ……心臓をねらうんだ……あたった！』この善良なる人々は張りぼてやパイプじゃちっとも喜びませんが、的が人間の顔形であれば感激の極みです。下手な人は腹を立てますが自分の下手さかげんにではなく、当てそこなった人形に対して腹を立てるんです……。人形が無きずで城門のむこうに引っこんじゃうと、卑怯者と言ったり、聞くにたえない罵声を浴びせかけ

たりします、……挑発するわけです。『さあ来い、このとんまめ！』そうやってついに殺すまで彼らに向かって撃ちつづけるのです……。ひとつこの善良な人たちを見てごらんなさい……。そんなときの連中は、もうまったくの殺人鬼です。殺戮欲求だけにつき動かされている存在です。それまで身体の中で眠っていた食人鬼が、何か生きているものをぶち殺すのだという幻影を前にして目覚めるのです。なにしろ背景の前を行ったり来たりする人形は、厚紙製だろうが練ものだろうが木製だろうが、もはや彼らにとっては玩具でも無生物のかたまりでもなくなるんです……目の前を行ったり来たりするのを見ているうちに、その人形に熱い血潮や、敏感な神経や、思考だとかいった、それをなくしてしまうことが何とも甘美に思えるようなものを想像してゆくんです。そういったものが、彼らによって与えられた傷口からしたたり落ちるのを見て残忍な快楽を味わうんです……。さらにはその人形に、彼らの奉ずる政治や宗教と反対の信条を与えたり、あるいは、そういった全体的な生命の軽視に個人的な憎しみを付け加えるべく、ユダヤ人とか、イギリス人とか、ドイツ人とかに見たてたりするようにもなります。そうやって本能的な殺しの悦楽を、内心であたためていた個人的な報復によって倍加するわけです」

ここで家の主人が口をはさんだのは、客人への礼儀と、同時に、この哲学者先生にも、そしてわれわれにもちょっと息抜きをさせてやろうという暖かい心づかいによるものであったが、その口調は確信に満ちたものではなかった。

「田夫野人についてお話なら賛成です、連中はいつでも殺戮の状態にいるんですからな……。で

も、『文化人』や『教養人士』とか、たとえば貴顕紳士などといった、その生きている時間の一時間一時間をもって生来の本能や頑固に存続する野性の克服に捧げている人たちには、そいつはあてはめるわけにはまいりませんな」

すると哲学者先生が勢いこんで曰く、

「お言葉を返すようですが……。あなたのおっしゃるその『文化人や教養人士』なるものの好んでするところの習慣なりたのしみなりはいかがなものでしょうな？　剣術、決闘、激しいスポーツ、忌まわしき鳩撃競技、闘牛、愛国主義の各種示威運動、狩猟……これらすべて、こう言ってよろしければ狩りたてていた対象たる野獣と精神的になんら変わるところのなかった原始時代への退行にほかならぬというのが実際のところでしょうが。もっとも、こういった先祖の風習がたいていは、うまく適応できずにいるなかで、とりわけ狩猟が生きのびていることについては不平を言ってはならんのでして、それこそ強力な発散の手段ですからな。『文化人や教養人士』も、その体内にあいかわらず流れている破壊衝動や血の欲求を、同胞を脅かすことなくそれによって発散させているわけで。そいつがなかったら鹿狩り、猪狩りだの、草地の無邪気な鳥どもをぶち殺したりだのするかわりに、こりゃもうまちがいもなしにわたしらのほうへ、その『教養人士』が猟犬をけしかける。『文化人』がたのしげに鉄砲をぶっ放す……そりゃもう、やつらときたらそうできるときにやらないはずがない。やり方にはいろいろあっても、手許に狂いはなし、……それにこいつははっきり認めるべきですが、野蛮人たちほどの偽善者ぶりも見せずにです……。いやまったく！　野や

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com